

「感性(sensibilité)」をめぐるベルクソンの思想とその成立の経緯

——なるものと多なるものとの関係を軸に——

村上 龍

序

アンリ・ベルクソン (Henri Bergson, 一八五九—一九四一年) の最後の名著『道徳と宗教の二源泉』(一九三二年)のうちには、分量はさほどではないが、「感性(sensibilité)」について論じた文章が見いだされる。本稿では、同時代の思想的環境にも顧慮してベルクソンの「感性」概念の独自性を測るとともに、近年ようやく公になりつつある講義録等から読みとれる哲学史上の知見などもふまえて彼の術語体系の編成、再編成の過程を跡づけることによってその成立の経緯を明らかにする。一連の考察をへて、ベルクソンがカント哲学の批判的な受容のすえに、一と多の対概念にてらしてカントのそれとは対照的な「感性」の構想にゆき至ったことを結論として提出し、近年活発化している、ドイツ近代哲学、美学のフランスにおける受容状況にかんする研究⁽¹⁾の一翼を担うことを目指す。

本発表の研究史上の位置づけについて二点ほど付言しておく。

第一に、『二源泉』の当該個所に着目した研究は一定数見いだせ

るが⁽²⁾、ただし、そこにおいて「感性」を論じる旨をベルクソン自身が言明しているのとは裏腹に、一見特異にも映るその独自性ゆえか、これを「感性」の問題として考察したものは管見のかぎり見あたらない。だが、同時代の思想的環境に鑑みるとき、それはたしかに、一九世紀末から二〇世紀前半のフランスで定着していた「感性」にまつわる用語法をふまえつつ、そこに独自の観点を加味した文章なのであって、そのかぎりにおいて、ここではベルクソン特有の「感性」概念が提出されているものと考えることができる。

第二に、ベルクソンの著作は哲学史への論及を多く含まないため、彼の思想と哲学史的な背景との相関を読みとることが従来難しく、主要な仮想敵と目されるカントとの関係についても例外ではなかった⁽³⁾。だが、近年公になりはじめた講義録等を著作とあわせ読むとき、「感性」にまつわる同時代の用語法をはみ出すベルクソン独自の側面は、その枠組がある程度ふまえつつカントを乗りこえるべく世紀の変わり目をまたいでなされた、一と多の対概念にそくした自身の術語体系の編成ないし再編成の産物であることが分かるのである。

第一節 ベルクソンの「感性」概念の独自性

——一性の〈受容〉、多性への展開——

一 ラランドの『哲学辞典』における「感性」概念

『二源泉』の検討に先だつて、当時のフランスにおける哲学上の用語法をふまえておきたい。ここでは紙幅の都合上、ラランドの『哲学辞典』をとりいそぎ参照するにとどめる(4)。

この用語辞典では、「感性」が「情緒的な (émotion) 性格を有した状態を経験する」「能力」とされ、そのさい情緒的状态の主たるものとしては「感覚 (sensations)」と「感情 (sentiments)」とが挙げられている(5)。そして、「感覚」および「感情」といえば、前者が「生理的な刺激によって条件づけられた」情緒的状态として(6)、後者が「精神的な (morales) 原因」に由来する情緒的状态として(7)、それぞれ対比的に規定されている。このように『哲学辞典』は、「感性」を「情緒性」にあずかる受動的な能力とみなしたうえで、そのもとに、生理的な刺激に由来する「感覚」と精神的な原因に由来する「感情」とを包摂するのである。

二 『道徳と宗教の二源泉』における「感性」概念

以上をふまえ、『二源泉』で提示される「かくもおおきく立派な地位を感性にさすける心理学」(D.S. 41: 1012)の検討に入ろう。

二一 「感性」概念の外延としての「感情」と「情動」

ベルクソンは、「感情」(émotions)、「情念 (passions)」

などの語を、相互の種差には頓着せず融通無碍に用いながら(8)、「感性」にかんして問題となるのがまずは何らかの「情緒的状态 (states affectifs)」(D.S. 40: 1011)であることを明言する。ただし、「感覚」については、これを「物理的な刺激」(ibid.)に還元される情緒的状态とみなしつつ視界の外に置く。つまり、彼の用語法のうえでは、「感覚」とはことなつて物理的な刺激に由来しない情緒的状态が、時におうじて「感情」、「情動」、「情念」等々と呼びわけられながらも、ひろく「感性」に属するものとして一括されるのである。そして、論及の頻度に鑑みると、なかでも「感情」と「情動」が「感性」概念の主たる外延と考えられていることは間違いない(9)。

とすればベルクソンは、「感性」を「情緒性」によって規定する視点を『哲学辞典』と共有しながらも、その外延にかんしては見解を異にしている。なるほど、彼も「感性」のもとに「感情」を包摂してはいる。だが、ベルクソンは第一に、『哲学辞典』と同様に物理的ないし生理的な刺激に由来するものとみなされた「感覚」を、この用語辞典とはことなつて「感性」の埒外に置く。そして第二に、『哲学辞典』がそうしないのとはことなつて、「感性」概念の低位区分を問題とするうえで「情動」という用語を重く用いるのである(10)。

二二 「感性」概念の「知性—以下の」〈成分〉

では、物理的な刺激に由来しない情緒的状态は、積極的にはいかなるものであるのか。先述のとおり、ベルクソンは「感情」と「情動」とのあいだの種差には頓着しない。彼にとって重要なのはむしろ、それら情緒的状态全般を二種に区分することである。

ベルクソンによれば、一方で、「感性的状態 (état sensible)」が、

それに何ら負うところなく自足している知性的状態 (Etat intellectuel) の結果として生じる」場合がある。このような、「表象が飛び込んでくることで起る感性の動揺」とも言うべき情緒的状态については、表象ないし知性的状態とのあいだの先後関係、因果関係にてらして、ベルクソンはこれを「知性—以下の (infra-intellectuelle)」と形容する (D.S. 40-41 : 1011-1012)。

ここで言われる「知性—以下の」情緒的状态は、ラランドの『哲学辞典』が「感情」と呼ぶものに相当すると考えられる。この用語辞典において、「感情」が「精神的な原因」に由来するものとされていることは、先にみたとおりである。

二—三 「感性」概念の「知性—以上の」〈成分〉

他方で、「やがて生じる知性的状態に対して結果ではなく原因となる」、そのような情緒的状态が存することをベルクソンは主張する。それら情緒的状态は「きちんと形づくられていない」萌芽的な段階において「諸々の表象を孕んでいる (grosse de représentations)」のだと彼は言い、やはり表象とのあいだの先後関係、因果関係にてらしてこれを「知性—以上の (supra-intellectuelle)」と形容する (D.S. 40-41 : 1011-1012)。

だが、知性的状態を孕んだ感性的状態なるものを、我々はどのように理解したらよいだろうか。この点について、ベルクソンは明示的には語ってはいない。そこで、「知性—以上の」情緒的状态の代表例として折にふれ言及される、芸術家や作家のやどす「情動」にかんする記述に手がかりをもとめつつ考察を深めたい。

二—三—一 〈情緒的・触発的〉状態

「天才的な作品はたいていの場合、その種のものとしては二つとない (unique en son genre) 情動から生まれた」(D.S. 43 : 1013) とベルクソンは言う。こう述べることで彼が主張したいのは、そうした「二つとない情動」が、「ひとたび実現された当の作品によってようやく満たされるに至る」であろう「特定の」「創造の要求」をうちに含むということである (D.S. 44 : 1014)。つまり、芸術家や作家のやどす「情動」は一定の諸表象を形成するよう彼らに要求するものであつて、創作とはそれに応えるべく「知性的な平面のうえで」(D.S. 268 : 1190) 立ち回る、そのかぎりにおいて創り手の統制下に収まりきらない側面を多分に有した営みだというわけである。

では、彼らはいかなる経緯からそうした「創造の要求」を、しかも一種の情緒的状态として抱えこむことになるのか。この点については、作家の「情動」を「事物の根底そのものから受けとられた振動」(D.S. 269 : 1191) と換言する箇所と、「著者と主題との合致 (coincidence) から」「独自で二つとない情動」が「生まれ」る (D.S. 43 : 1014) ことを述べた箇所とをともに、こう考えることができよう。ようするに芸術家や作家は、自らの主題となるべき事象から、いまだ実現されざる「独自で二つとない」可能性を潜在的な諸表象として汲みとり、いやむしろ託され、それに付随して魂を情緒的に「振動」させるのである。たとえば、美的な喜びの源泉としての可能性をそこに見いだして山岳にまつわるヨーロッパ人の表象を一変させたルソーが、その原点において「あたらしい独自の情動」(D.S. 38 : 1009) を受けとっていたように(11)。

このように、「知性—以上の」情緒的状态とは、いまだ実現されざ

る可能性をひめた他なるものに由来する〈触発的＝情緒的 (affectif)〉状態なのである。ランドの『哲学辞典』には、こうした着眼、それも、この用語辞典が「感性」の主たる外延には数え入れない「情動」の語を多用して示される着眼⁽¹²⁾はいっさい認められない。

二―三―二 統一からの〈分散〉

そして芸術家や作家はこのような「創造の要求」をうけ、「知性的な平面」のうえでいかにして立ち回ることになるのだろうか。

「文筆の仕事に携わった者なら誰でも、ひとり放っておかれた知性と、独自の二つとない情動「…」の火に焼きつくされた知性とのちがいを確認することができたはずだ」と言うベルクソンは、前者の仕事は「多なる諸要素から出発し、既存の配列をあらたに組みかえただけの寄せあつめた統一に到達する」こととして論じるのと対比的に、後者の仕事を「一にして二つとなす (un et unique)」ものの多数の観念、語への展開として語る (D.S. 4344 : 1013-1014)。つまり、「知性―以上の」情緒的状态のうちに孕まれてある潜在的な諸表象の形成過程は、統一からの〈分散〉として定式化されるのである⁽¹³⁾。

これは裏をかえせば、芸術家や作家の受けとる実現されるべき可能性が統一ないし一性により特徴づけられることを意味しよう。「源泉」ではこの点について詳論されていない。だが、おなじく統一からの〈分散〉の構図にそくして知性的な努力を論じた論文「知的努力」(一九〇二年)をあわせ読めば⁽¹⁴⁾、そのさいの統一、一性が、未形成の諸要素の渾然たる (confuse) 相互浸透から成るものであることが分かる。「知性―以上の」情緒的状态のうちなる潜在的な

諸表象は未形成ゆえに渾然と浸透しあっており、だからこそ芸術家や作家がこれを判明な (distincte) 多性へ展開するとうわけである。

ここまでの議論をまとめよう。第一に、ベルクソンにとって「感性」とは「情緒性」にあずかる能力だが、ただし、それは物理的ないし生理的な刺激とは無縁である。それゆえ、彼は「感情」や「情動」を「感性」概念のもとに包摂する一方で、「感覚」をその埒外に置く。第二に、ベルクソンにとって「感性」とは、その「知性―以下の」〈成分〉にかんしては、表象ないし知性的状態から情緒上の効果を被る、そのかぎりで受動的な能力である。第三に、ベルクソンにとって「感性」とは、その「知性―以上の」〈成分〉にかんしては、いまだ実現されざる可能性を〈受容〉する、そのかぎりで受動的な能力であると同時に、受けとられた可能性の実現にむけて知性に働きかける、そのかぎりで能動的な能力である。なお、そのさい受けとられる可能性は一性によって、すなわち諸要素の渾然たる相互浸透から成る一性によって特徴づけられるから、その実現のプロセスは統一からの〈分散〉として定式化される⁽¹⁵⁾。第五に、以上の考え方は同時代の思想的環境に鑑みたとき、外延にかんする「感覚」の除外と「情動」という用語の重用、およびとりわけ、「情動」の語を多用しつつ一と多の対概念をつうじて語られる「知性―以上の」〈成分〉への着眼において、独自性を有する。

三 一九世紀末の「心理学講義」における「感性」概念

だが、ベルクソンは当初からそのように独自の考え方を貫いていたわけではない。処女作『意識に直接あたえられたもの』についての

試論』（一八八九年）や第二主著『物質と記憶』（一八九六年）の刊行と相前後しておこなわれた三つの講義、すなわち、一八八七—八年度、一八九二—三年度、一八九三—四年度⁽¹⁶⁾の「心理学講義」のなかでは、彼は「感性」を「情緒性」にあずかる能力としたうえで（C.I.48, C.II.237, C.P.68）、その主たる外延として、物理的ないし生理的な刺激に由来する「感覚」と、知性的な表象をはじめとした精神的な原因に由来する「感情」とを数えあげ（C.I.59, 64, C.II.220, 227, C.P.68）、ゆえにまた、「知性—以上の」〈成分〉への着眼を欠いたまま、この能力を端的な受動性によって規定する（C.I.52）。ようするに、ベルクソンは一九世紀末の時点では、最後の主著におけるのとはことなつて、のちにラランドの『哲学辞典』によって提示されることになる枠組を正確に先どりしているのである⁽¹⁷⁾。

四 「感性」概念と「直観」概念の交差

では、彼はいかにして独自の構想を育んだのか。この点にかんして注目すべきは、『二源泉』において、「感性」の「知性—以上の」〈成分〉に論及するなかでときに「直観 (intuition)」の語が用いられることである⁽¹⁸⁾。無論そうしたさいに、哲学上のあるべき認識方法を意味する彼固有の術語としての「直観」それ自体が問題とされるわけではない。だが、『二源泉』で提出された「感性」概念は、そのもつとも独自の側面と言つてよい「知性—以上の」〈成分〉を紹介して、ベルクソン哲学の枢要な概念の一つと連動しているらしい。「直観」概念がさいしょに提出されたのは、「心理学講義」と『二源泉』との狭間期にあたる一九〇三年のことである。だとすれば、「感性」概念の規定にみられる上述の変化は、「直観」、およびこれと密

接にかかわる「持続 (duree)」という自身の二大鍵概念にかんして、ベルクソンがこの時期にめぐらせた思索の産物ではないのか。

第二節 ベルクソンの術語体系の編成および再編成

——「二つの対概念にてらう」——

一 「直観」をめぐる議論と「感性」をめぐる議論の同型性

ベルクソンは論文「形而上学序説」（一九〇三年）で「直観」概念をさいしょに提出するさい、のちに「感性」の「知性—以上の」〈成分〉に論及する文脈でも登場する言葉を用いて⁽¹⁹⁾、これを「二つとない (unique) ものと合致する (coincider)」(P.M. 181 : 1395) こととして規定しているが、じつさい、「直観」をめぐる議論と「感性」の「知性—以上の」〈成分〉をめぐるのちのそれとのあいだには、言葉上の類似にとどまらない同型性が認められる。

論文「哲学的直観」（一九一一年）でベルクソンは、「直観」をうじて対象と「合致」した哲学者が対象から「衝撃」を受けとり学説形成の「運動」へと差しむけられることにふれ (P.M. 123 : 1350) ⁽²⁰⁾、しかも、その「運動」を「統一」から出発する「分析」として論じている (P.M. 138 : 1362)。また、論集『思想と動くもの』（一九三四年）の「序論」（一九二二年）では、「直観」をつうじ得られる「総合的な知性—以上の視覚」を「分析的に検証することこそが知性の役割である旨を彼は述べている (P.M. 67 : 1305)。このように、ベルクソンは「直観」をめぐる、のちに「感性」の「知性—以上の」〈成分〉を論じるさいと同様に、知性との連携にも言及しつつ、一性の〈受容〉とその多性への展開を語るのである。

そして、再度「形而上学序説」にたち戻るならば、「文筆の仕事に携わり、しかも成功した者なら誰でも知っているように」という、『二源泉』を連想させずにおかない文言²¹⁾からはじまる一節でベルクソンは、作家が「主題の核心そのもの」から「衝撃」を「受け」とり、「単純な」その「衝撃」を「分析」する「運動」へと投げだされることにふれたうえで、「形而上学的直観もこれと同種のものである」と言う (P.M. 225-226: 1431-1432) ²²⁾。してみると、「直観」をめぐる議論は芸術ないし文学への参照のうえに成りたっており²³⁾、しかもそのさいベルクソンがとくに注目するのは、のちに「感性」の「知性—以上の」(成分)に論及するうえで注目することになるのと同一の局面なのである。だとすれば、『二源泉』で提示される「感性」の構想は、「直観」概念を確立する過程で、芸術的もしくは文学的な創作について省察を深めることをつうじ育まれたものとみられる。そうであってみれば、「直観」をめぐる議論と「感性」の「知性—以上の」(成分)をめぐるそれとのあいだに同型性が認められるのも当然であって、またそれゆえにこそ、ベルクソンは『二源泉』においてときとして「直観」の語を用いるわけであろう。

二 世紀の変わり目をまたぐ「持続」概念の再規定

「直観」の「基礎的な意味」を「持続において考える」(P.M. 30: 1275) ことにもとめるベルクソンにとって、哲学上のあるべき認識方法としての「直観」の対象とは「持続」において他にない。そして、上述のようにベルクソンが二〇世紀初頭以降に、一と多の対概念をつうじて、「感性」をめぐるのちの思想に結びつくような仕方
で「直観」概念を確立するに至ったことは、彼が処女作以来の鍵概

念である「持続」を世紀の変わり目をまたいで規定しなおしたことと、じつは高度に相関的である²⁴⁾。

一八八九年の処女作『試論』でベルクソンは、カントの超越論的感性論に同意しつつ、「空間」を「相互に判明な諸項が配列される」「等質の環境」(D.I. 170: 147)として規定し、これを多性によって特徴づける。だが、彼は時間についてはカントに同意せず、「諸々の音」が「溶けて一つになった」「旋律」の比喩にもうったえながら、諸要素の渾然たる「相互浸透」(D.I. 75: 68)から成る一性を独自にそこに認め、そうした時間の在りようをとくに「持続」と名づける。そして、一方で「持続」の「空間」化をいましめ²⁵⁾、他方外界に「持続」を認めることを控えて²⁶⁾、両者をきびしく峻別する。

だが、一八九六年の第二主著『物質と記憶』において、彼ははやくも一なる「持続」と多なる「空間」とのあいだの連絡を回復しようとして模索しはじめ²⁷⁾、その念願は一九〇三年の論文「形而上学序説」をへて²⁸⁾、第三主著『創造的進化』(一九〇七年)で成就する。

ベルクソンは、一方で我々の「持続」よりも「緊張 (tension)」の度合いのたかい「超意識 (supraconsciousness)」(E.C. 246: 703, 261: 716)を想定し、また他方で、「緊張」を緩めた我々の内的生において諸要素が相互浸透をやめ離れてゆく、その傾きを「延長 (extension)」と呼びつつ、これをいつそう押しすすめた先に「外的な拡がり」を、そして「終端」には「空間」を指定する (E.C. 203-204: 666-667)。内界と外界とにまたがる「延長 ≡ 脱緊張 (extension)」概念を介して、一なる「持続」から多なる「空間」にわたる、あるいは「超意識」から「空間」にまで至る、「緊張」の度合いにおうじた二元的な系列を語ろうというわけである。

そして、そのうえでベルクソンは、「高圧の＝緊張度のたかい (une haute tension)」「生命の貯蔵庫」としての「超意識」より発する世界の創造を、「空間」へむかう落下として論じる (E.C. 248: 705)。一なるものと多なるものとの二元性を度合いによつて解消したあとで、こんどは統一からの〈分散〉の構図をそこに適用しようというのである。こうして「持続」と「空間」とが相互の連絡を回復し、多性への展開の可能性を孕んだ一性として「持続」は規定しなおされたことになる⁽²⁹⁾。世紀の変わり目をまたぐこのような「持続」概念の変化のゆえにこそ、ベルクソンは二〇世紀初頭以降、「直観」概念をめぐって一性の〈受容〉とその多性への展開を語るのがある。二つとないものと「合致」した哲学者が「衝撃」を受けとるのは⁽³⁰⁾、当の二つとないものそれ自体が「衝撃」を含みもつからなのである。

なお、この「持続」の再規定にもなつて、「知性」が「直観」とは真に対照的な認識能力を意味する用語として術語化される。ベルクソンは「知性」を、「延長＝脱緊張」の終端に位置する多なる「空間」にそくした、したがつて、「直観」が一なる「持続」にそくして「現実を絶対的に所有する」(P.M. 181-182: 1396)のと相補的に「原理上、絶対的なものにふれる」(P.M. 84: 1319)ことを約束された能力として規定するのである⁽³¹⁾。それだからこそ、一性の〈受容〉が「直観」に割りあてられる一方で、その多性への展開にさいしては「知性」との連携が語られるのであろう⁽³²⁾。

三 一九世紀末の講義におけるカント哲学への取りくみ

ところで、一九世紀末の講義の記録をみるかぎり、世紀の変わり

目に一と多の対概念にそくしてなされた上述のごとき術語体系の編成および再編成は、その枠組がある程度ふまえつつカントを乗りこえようとする意図に裏うちされていたものとみられる⁽³³⁾。

知性界と時間および空間をつうじあたえられる感性界とを峻別する二元的な世界観のもとで、自由なる自我「それ自体」の認識可能性を否定するカントに対して⁽³⁴⁾、ベルクソンは処女作『試論』においては、自身に固有の時間概念である「持続」にそくした内的経験として自由を語る自らの立場を対置するばかりであった⁽³⁵⁾。だが、一八九三―四年度の「心理学講義」では一転して、彼は正面からカント哲学に相対し、あくまでカント的な枠組の内部にとどまりつつその二元的な世界観に修正をほどこす方途を模索する。カントが感性界と知性界との峻別に固執するのは「絶対的な必然性」や「絶対的な自由」(C.II 263)ばかりを念頭に置くがゆえであることを指摘したうえで、極限的な必然性と自由とのあいだに「無数の中間的な度合い」(C.II 299)を想定する観点を導入すべきことをベルクソンは提言するのである。

そして、おなじく一八九三―四年度におこなわれた『純粹理性批判』についての講義』では、「そこから流出する感性的な多性に先だつ」(C.III 167)、「そのような「統一」」(C.III 165)として、カントが自我「それ自体」を暗に構想していたとベルクソンは言い、さらには、「持続する」「我々の人格」が現に「深い直観」をつうじて「分割されざる全体として」あたえられていることを根拠に、この「統一的な自我「それ自体」が、カント流の「知的直観」とは別種の直観によつてではあれ、たしかに経験されうることを彼は主張する(C.III 173)。自由と必然性との二元性を度合いによつて解消したあ

とで、こんどは両者をむすぶ系列に統一からの〈分散〉の構図を適用しつつ、自身の術語体系との接点をさぐるとういうわけである。

このように、ベルクソンは一九世紀末に、言うなれば知性界にかけて、多性への展開の可能性をひめた感性界をあらたに設け、自身に固有の時間概念である「持続」をこれに重ね合わせることにによって、あるいは、多性とこれを産みだす一性とをあわせ収容するものとして感性界を拡張しつつ、そのうちの一性のほうに「持続」を重ね合わせることによって、あくまでカント哲学の枠内で、自由なる自我「それ自体」の認識可能性を確保しようとする。だとすれば、世紀の変わり目をまたぐ、一と多の対概念をつうじた術語体系の編成、再編成にさいして、彼はカントのことを念頭に置いていたものとみられる。じつさい、一九〇七年の第三主著『創造的進化』のなかでも、そのさりげない一節においてベルクソンは、カントが経験の「相反する」「二つの方向」を見わけられなかったがために、多なる「空間」にそくした、そのかぎりにおいて「知性」に従属する「知性―以下の」「直観」をしか措定できず、「知性」とは対極にある、一なる「持続」にそくした「知性―以上の」「直観」に思い至らなかつたことを指摘している (E.C. 358-359: 798-799)。ようするに、多性の受容によって特徴づけられるカント的な「直観」を「空間」にそくしたものとみなし、これを「知性」に近づける一方で、「知性」の対極にある自身の「直観」概念を、カントが構想することもありえた「物自体」に対応する「直観」として位置づけようというのである³⁶。

さて、事の次第がそのようであれば、「直観」概念を確立する過程でベルクソンが「感性」をめぐる独自の構想を育てたのも当然のことであつたと言える。カント哲学との対話のなかで「知性―

以上の」「直観」を措定することをつうじて、多性の受容によって特徴づけられる端的な受動性としてのカント的な「感性」とは対照的な、一性の〈受容〉によって特徴づけられる受動的かつ能動的な「感性」の構想に、すなわち「知性―以上の」〈成分〉をも視野におさめた「感性」の構想に、ベルクソンは正当にもゆき至つたのである。

また、彼が「感性」の圏域から「感覚」を締めだすのも、おそらくはこの点に関連してのことである。たとえば、ラランドの『哲学辞典』においても「感覚を経験する能力」として定義されている「感官 (sens)」について³⁷、ベルクソンは論集『思想と動くもの』の「序論」のなかで、「我々の知性は我々の感官の延長である」(P.M. 34: 1278)と述べる。してみると、「感覚」とはベルクソンにとって、「空間」にそくした「知性―以下の」「直観」をつうじて、すなわち彼が理解するかぎりのカント的な「直観」をつうじて、あたえられるものなのである。それだからこそ、カント的な「感性」の対極に位置づけられるべき「知性―以上の」〈成分〉に着眼し、かつその〈成分〉をとくに強調するベルクソンは、あえて同時代の思想的環境にたらしめて特異に映る仕方で「感覚」をとりあつかうのであろう。

結 語

以上、「感性」をめぐるベルクソンの思想とその成立の経緯を考察してきた。上述のように、彼がカント哲学の批判的な受容³⁸のすえに「感性」をめぐる独自の構想を育てたのだとして、その思索の軌跡はおそらく、カントをはじめとした近代ドイツ哲学、美学の受容につとめる同時代のフランス哲学、美学の全般的な動向³⁹を

下地としている。ベルクソンの思索が有する射程はそうした同時代の動向のうえに置きなおしたときにこそいっそう正確に測られるも

のと思われるが、この点を今後の課題として本稿を閉じたい。

凡例

ベルクソンの著作からの引用は *Oeuvres*, édition du centenaire, André Robinet (éd.), P.U.F., 1991 (1959^{1re}) に拠り、以下の略号とともに単行本・著作集の順に頁数を () 内に記す。

- D.I. : *Essai sur les données immédiates de la conscience*, 2007 (1889^{1re}).
- M.M. : *Matière et Mémoire*, 2008 (1896^{1re}).
- E.C. : *L'évolution créatrice*, 2007 (1907^{1re}).
- E.S. : *L'énergie spirituelle*, 2009 (1919^{1re}).
- D.S. : *Les deux sources de la morale et de la religion*, 2008 (1932^{1re}).
- P.M. : *La pensée et le mouvant*, 2009 (1934^{1re}).

講義録等の資料については以下の略号を用いる。

- CI : *Cours I*, Henri Hude (éd.), P.U.F., 1990.
- CII : *Cours II*, Henri Hude (éd.), P.U.F., 1992.
- CIII : *Cours III*, Henri Hude (éd.), P.U.F., 1995.
- C.P. : *Cours de Psychologie de 1892-1893*, Sylvain Matton (éd.), Seha / Arche, 2008.

註

- (1) Cf. François Azouvi, Dominique Bourel, *De Königsberg à Paris*, Vrin, 1991. Jean Quillen (éd.), *La réception de la philosophie allemande en France aux XIX^e et XX^e siècles*, Presses universitaires de Lille, 1994. Yves Radrizzani (éd.), *Fichte et la France*, Beauchesne, 1997.
- (2) のちにみるように、当該個所では「情動 (émotions)」という用語が重用されるため、これに焦点をしばって当該個所を検討する仕事は枚挙にいとまがなからず、そして「モゼーバスタイン」や「ワールズ

- (3) をはじめとして、それら先行研究は大なり小なり、本稿で「感性」の「知性—以上の」(成分)と呼ぶものに着目しており、そのかきりて本稿はそれら先行研究に負うところが大きい。Cf. Rose-Marie Mossé-Bastide, *Bergson et Plotin*, P.U.F., 1959. Gilles Deleuze, *Le bergsonisme*, P.U.F., 1966.
- (4) もちろん、バルテルミ・マドールをはじめとして、カントとのあいだの思想内容上の類似ないし差異を考察する、そのような意味での比較研究は従来より存する。Cf. Madeleine Barthélemy-Madaule, *Bergson, adversaire de Kant*, P.U.F., 1966.
- (5) この用語辞典は、フランス哲学会の会員が一九〇二年から一九三三年にかけて重ねた討議をもとに、マントレ・ラランド (André Lalande, 一八六七—一九六三年) を編者として一九二六年に刊行されたものであるから、ここには哲学上の術語にかんする当時の哲学者たちの総意が反映されているものと考えよう。
- (6) André Lalande (éd.), *Vocabulaire technique et critique de la philosophie*, P.U.F., 2002 (1926^{1re}), p. 981. なお、「情緒をあたえぬ (affecter)」という用語は「感性に作用をおよぼすこと」と定義されている (Lalande, *op.cit.*, p. 28)。したがって、ここでは「情緒」概念が受動性によって規定されているものとみられる。
- (7) Lalande, *op.cit.*, p. 976.
- (8) Lalande, *op.cit.*, p. 985. なお、「精神的な」という形容詞の使用については、「物体やその他の物質的な対象ではなく精神 (l'esprit) に関連する」(Lalande, *op.cit.*, pp. 653-654) という含意が念頭に置かれている。
- (9) Cf. D.S. 35-36 : 1008, *etc.*
- (10) Cf. D.S. 36-38 : 1008-1010, 40-44 : 1011-1014, 44-46 : 1015-1016, 78-80 :

1041-1042, 267-270 : 1189-1191, etc.

- (10) なお、『哲学辞典』においては「情動」は「快 (plaisirs)」や「苦痛 (douleurs)」とならんで「感情」の低位概念とされてゐる (Lalande, *op. cit.*, p. 985)。そして「情動」それ自体はといえば、「突然の、しばしば激しく、強く、運動の増加もしくは停止をとまなう、そうした衝撃」として規定されてゐる (Lalande, *op. cit.*, pp. 278-279)。以上を総合すると、ここでは「情動」という用語が、精神的な原因に由来する情緒的状态としての「感情」のうちで、とくに激しく強いものを意味すると考えられる。
- (11) ヘルクソンはまた、わが子が孕む「複数の可能性 (possibilités)」を予見する母親の「感性」などにもふれてゐる (D.S. 41 : 1012)。ただしその場合には、当の可能性を展開するのは母親ではなからう。
- (12) 「知性—以上の」情緒的状态に論及するさい、ヘルクソンは相対的に「情動」という用語を多用するが、無論その文脈で「感情」が用いられなうわけではなからう。 Cf. D.S. 78-80 : 1041-1042, etc.
- (13) Cf. Georges Mourélos, *Bergson et les niveaux de réalité*, P.U.F., 1964.
- (14) とりわけ、「知性の仕事」のなかで「もとも容易」なものとヘルクソンが考える「想起」(E.S. 155 : 932) にかんする議論を参照されたい。 Cf. E.S. 159-167 : 935-941.
- (15) これまでみてきたように、「感性」の「知性—以上の」〈成分〉に論及するさい、ヘルクソンはしばしば芸術的もしくは文学的な創作に、それも天才的な作品に結実するであらうそれにそくして話をすすめる。だが、彼はこの〈成分〉を一部の特権的な人間にのみ割りあててゐるのではけつしてない。たとえば、先にもふれたように、彼はわが子を目の前にした母親の「感性」についても語つてゐる。あるいは、やはり先に確認した、山岳に触発されたルソーの「感性」に言及する一節で、ルソーの受けとつた「情動」がその後「一般に流布した」ことを彼はあわせて述べてゐる (D.S. 38 : 1009)。また、文学的な創作の場面にそくして議論を展開するさいにも、「詩人の魂のうちを生じた」「その種のものとしては二つとない」「情動」が、作品を
- (16) 介して、こんどは読者たる「我々の魂を振動させる」ことにも、ヘルクソンはやはりあわせて言い及んでいる (D.S. 44 : 1014)。
- (17) 『ヘルクソン講義録Ⅱ』所収の「一九三—四年度の「心理学講義」は当初、編者ユードによって一九二—三年度におこなわれたものと推定されていた。だが、二〇〇八年にあらたに公刊された一九二—三年度の「心理学講義」の編者マットンによれば、ユードの推定は一年度の誤差を孕んでゐる。 Cf. C.P. 39-53.
- (18) なお、一九世紀末に刊行された『意識に直接あたえられたものについての試論』、『物質と記憶』においても、その点について明示的に語られてはいないけれども、ヘルクソンが同様の枠組を踏襲していることがうかがわれる。 Cf. D.I. 22-23 : 23-24, M.M. 11-12 : 169-170, etc.
- (19) 我々は先に、「知性—以上の」「情動」が「著者と主題との合致から」生じると述べられていることを確認したが、じつはこの「合致」は直後で「直観」(D.S. 43 : 1014) と換言されてゐる。
- (20) 本稿第一節二—三—を参照されたい。
- (18) ここで言われる「衝撃」に注目した研究には、以下のものがある。
Léon Husson, *L'intellectualisme de Bergson, genèse et développement de la notion bergsonienne d'intuition*, P.U.F., 1947. Rose-Marie Mossé-Bastide, "L'intuition bergsonienne," *Revue philosophique*, Avril-Juin, 1948, pp. 195-206. Henri Gouhier, "Bergson et l'histoire des idées," *Revue internationale de philosophie*, 10, 1949, pp. 434-444. モセ＝バステイドは「直観」における「生産的な原因性」をとりすがりに指摘するのみだが (Mossé-Bastide, *op. cit.*, p. 200)、「ユッソンならびにグイエは、「直観」をめぐる議論と『二源泉』における「知性—以上の」「情動」をめぐるそれとのあいだの関連性に着目しており (Husson, *op. cit.*, pp. 192-193. Gouhier, *op. cit.*, p. 438)、「その点で本稿と視点を共有する。また、拙稿「創造性の伝播——ヘルクソン美学への一視座——」(『美学』、五七巻一号(二二五号)、二〇〇六年、二八一—四一頁)もあわせて参照されたい。

- (21) 本稿第一節二—三—二を参照されたい。
- (22) 瀧一郎はここから、ベルクソンのな「直観」における観想と創造との一体性を読みとっている。Cf. Ichiro Taki, "Introduction à l'étude de l'esthétique bergsonienne - Première formation de la notion d'« intuition »," *Bijutsuka-kenkyū*, 14, 1996, p. 32)。この解釈は本稿の立場とただちに相重なるわけではないが、これと両立不可能なものではない。
- (23) そもそもベルクソンは、「直観」の可能性を芸術家の「美的な能力」によって担保しちよえしてゐる。Cf. E.C. 178-179: 645-646。
- (24) 本節二にかんしては、拙稿「ベルクソン哲学における「持続」概念の変化——カント哲学の批判的受容という動機にてらして——」(東京大学美学芸術学研究室紀要『美学芸術学研究』、二八号、二〇一〇年、二—四二頁)をあわせて参照されたい。
- (25) Cf. D.I. 54-55: 51, 73-76: 66-69, 81-82: 73-74, 90-96: 81-85, 144: 126, 148: 130, 165-166: 144-145, 170-180: 148-156, etc.
- (26) Cf. D.I. 84-85: 75, 86-87: 77-78, 89-90: 80, 157-158: 137-138, 170-171: 148-149, etc.
- (27) Cf. M.M. 202-203: 318-319, 230-231: 340-341, 243-244: 350-351, 249: 355, 276: 374, etc.
- (28) Cf. P.M. 208-211: 1417-1419。
- (29) なお、このような術語体系の再編成にあたって、ベルクソンは一九世紀末にプロティノス哲学から多くを学んだとみられる。この点については、拙稿「ベルクソンによるプロティノス哲学の受容——一なるものと多なるものの関係をめぐって——」(東京大学美学芸術学研究室紀要『美学芸術学研究』、二六号、二〇〇八年、五六—七七頁)を参照されたい。
- (30) 本節一を参照されたい。
- (31) 「知性」と「空間」との親近性への着眼それ自体は、すでに処女作『試論』にもかかま見られる。Cf. D.I. 71: 64, 73: 66。
- (32) 本節一を参照されたい。
- (33) 本節三にかんしては、前掲の拙稿「ベルクソン哲学における「持続」概念の変化」もあわせて参照されたい。
- (34) バルテルミッドールは、カントとベルクソンとが「絶対的なもの」への志向を共有することを述べたうえで、しかしながら、前者は二元的世界観を、そして後者は二元的世界観をとることによって両者が袂を分かつ理由を、一八世紀末以降の科学の進展にもとめてゐる。Cf. Barthélemy-Madaule, *op. cit.*, pp. 207-208。
- (35) Cf. D.I. 174-180: 151-156. そもそも、このカントへの論及は彼の本意でなかったようである。シャルル・デュボス (Charles Du Bos, 一八八二—一九三九年) がのこした一九二二年二月二日の対話の記録によると、ベルクソンは「一八八四年から一八八六年にかけて」書きあげた処女作の「初稿」では、「さしておおきな影響」も受けていない「カントのことを考慮に入れていなかった。だが、「当時の教員たちの目にかかれば」「この遺漏」は「博士論文」の「完全な失格」につながることに気づき、のちに修正をほどこしたのだと云々 (Charles Du Bos, *Le Journal I, 1921-1923*, Corrèa, 1946, p. 64)。また、『ベルクソン講義録』の編者ユードも、グイエから同様の話を伝え聞いたらしい。Cf. C.II 465。
- (36) ベルクソンの用語法、および、それとカントの術語とのあいだの関係について三点ほど補足する。第一に、ベルクソンはしばしば「知性 (intelligence)」と「悟性 (entendement)」とを無差別に用いており、両者を同義と捉えているようにみうけられる。Cf. E.C. 200-201: 664, etc. ただし、使用頻度は「知性」のほうが圧倒的にたかく、その意味では、彼にとつてはこちらのほうが基本的な術語である。第二に、先の点とも関連して、カントの術語体系のうえで「悟性」にあたるものに論及する場合、ベルクソンはたいいてい「知性」という用語を用い、しかもそのさい、実質的にはこれを自身の術語体系における「知性」の意味で理解している。Cf. E.C. 205: 668, etc. だからこそ、彼は一方でカント的な「直観」を「知性—以下の」と形容し、他方で、カントに反して自らが「物自体」にあてがう「直観」

を、「知性的」ではなく「知性—以上の」と形容するのである。この点にかんしては、ジャック・シュヴァリエ (Jacques Chevalier, 一八八二—一九六二年) が伝える、一九二〇年のベルクソンの次の発言もあわせて参照されたい。「知性」という語を、カントがこれにあたえているようにごく広い意味で捉えるならば、私の言う直観を「知的」と呼ぶこともできよう。だが、私は「知性—以上の」と言いたい。というのも、私は「知性」という語の意味を制限しなければならぬと考えたからであり、物質を思考することに元来割りあてられている精神の諸々の論証的な能力の全体のために、この語をとっておきたいからである」(Jacques Chevalier, *Entretiens avec Bergson*, Plon, 1959, p. 28.)。第三に、ベルクソンは「理性 (raison)」という用語をほとんど使用しない。このことはカントに論及する文脈についても、すくなくとも理論理性が問題となるかぎりにはあてはまり、それゆえたとえば、カント哲学における「悟性」と「理性」とのあいだの関係についてベルクソンが語ることもない(なお、カント的な意味での実践理性にかんしては、『二源泉』のうちにこれへの言及がみとめられる。Cf. D.S. 14-21: 991-997)。

(37) Lalande, *op. cit.*, pp. 967-968.

(38) シュヴァリエは、ベルクソンが一九〇七年六月三日に、「カントは諸々の用語をこしらえたのであり、彼をうち負かすためにさえそれら用語から逃れられない」(Chevalier, *op. cit.*, p. 16.)と語ったことを伝えている。なお、ベルクソンは自身のこうしたカント哲学との対話の在りようを、フィヒテのそれとは対照的なものとみていた。この点については、拙稿「ベルクソンのフィヒテ観——ポスト・カントの哲学のあるべき姿をめぐって——」(『シェリング年報』一五号、二〇〇七年、六五—七四頁)を参照されたい。

(39) たとえば、「新批判主義」を標榜したシャルル・ルヌヴィエ (Charles

Renouvier, 一八一五—一九〇三年) は、カント哲学を起点としながら、ただしその二元的世界観からは逃れようとする。Cf. Charles Renouvier, *Essais de critique générale*, Armand Colin, 1912 (1854-1897^{re}). また、ベルクソンが処女作で献辞をささげ、後年には「カントに執着した」ことが「彼にとつての不幸であった」(Chevalier, *op. cit.*, p. 37.)と回想することになるジュール・ラシュリエ (Jules Lachelier, 一八三二—一九一八年) は、カントにしたがうものと自ら信じながら、動力因のみならず目的因までも現象界のただなかに導入する。Cf. Jules Lachelier, *Du fondement de l'induction, et autres textes*, Fayard, 1992 (1902^{re}). ところで、ベルクソンが後年「彼の提示する学説はたいいていカントのそれであった」ために「弟子たち」を一様に「カント派 (kantians)」に仕立ててしまったと回想する (Chevalier, *op. cit.*, p. 38.)、高等師範学校時代のベルクソンの師エミール・ブートル (Émile Boutroux, 一八四五—一九二二年) も、カント哲学を自身の思索の出発点としながら、科学の進展にも目配せしつつ現象界のただなかへの自由の導入を模索する。Cf. Émile Boutroux, *De la contingence des lois de la nature*, P.U.F., 1991 (1905^{re}). Émile Boutroux, *La Philosophie de Kant, cours professé en 1896-1897*, Vrin, 1965. してみると、ベルクソンが離れたがる一九世紀フランスの「カント派」とのあいだの距離は、じつは彼自身が考えるほどには遠くないようにみえる。

本稿は第六二回美学会(於東北大学)における口頭発表(二〇一一年一〇月一七日)の原稿に加筆、修正をくわえたものである。発表にさいし貴重なご意見、ご批判をくださった方々に感謝を申しあげたい。また、本稿は平成二三年度文部科学省科学研究費補助金(研究活動スタート支援)による研究成果の一部である。